

# 脱構築された自己の帰結に関する一考察

——ある被爆証言者の語りを手がかりに——

武蔵大学非常勤講師 徳久美生子

## 1 目的

この報告の目的は、脱構築された自己がどのような帰結を迎えるのかを、ある被爆証言者に対する聞き取り調査の結果を手がかりに考察することにある。

いわゆるポストモダン期以降、近代的な自己概念は大きく見直されてきた。実際に「自己を位置づける強固な枠組みを欠く」（片桐 2011: 245）現代社会においては、「本当の自分」という言葉で表現されてきたような、個人の核を構成する自己を想定することはきわめて困難である。けれども自己は、それぞれの行為の中に所々出現するだけの、塵芥のようなものなのだろうか。だが自己の帰結をめぐる抽象的な議論から、脱構築された自己がどのような帰結を迎えるのかを読み取ることは難しい。そこで本報告では、脱構築された自己がどのような帰結を迎えるのかを、ある被爆証言者の事例を参照して考察する。

## 2 方法

脱構築された自己の帰結のひとつの事例として、ある被爆証言者（Aさん）への6回にわたるインタビュー調査の結果を分析する。10代で被爆したAさんは、原爆により生きていたことを否定されている。また戦後は、中間管理職として「自己を抑制して」会社勤めをしてきた。この自己否定と自己抑制の過程を経て、被爆証言者としてのAさんは、自身を「原爆にあっただけの運の悪い男」と表現するなど、「被爆者」である自己を脱構築している。自身を語るAさんの言葉は、常に否定的である。

本報告では、自己の否定、自己抑制の過程をふまえた上で、Aさんが自己の脱構築をどのように語っているのかを分析する。その上で、このような自己の脱構築が、現在のAさんの自己のあり方どのように関わっているのかを検討し、脱構築された自己の帰結を現すひとつのあり方として提示する。

## 3 結果

分析の結果、自己の否定、自己抑制の過程をへて自身を脱構築し続けていることが、Aさんの人間性を構築していることが明らかになった。Aさんは、ステレオタイプ化した「被爆者」像にあてはまられることを拒み、自己を否定し続ける。Aさんは、被爆証言の際にも、「自分は平和運動家ではない。また研究者でもない。ふつうの市民である」という。またAさんは、自身を悲劇の主人公にしない。家族を襲った悲劇を、当時の広島では普通のことだという。ところが結果的にはこの自己否定的な態度が、ひとりの市民として戦後を生き抜いたAさんという人物の核を形成している。つまり、自己の否定、自己の抑制というプロセスをへて、現在の自身を脱構築すると、否定され、否定し続ける自己には一定の持続性があると考えざるをえなくなる。自己否定のうちには、自己肯定の契機がある。

## 4 結論

ホネットは、人が他者から承認されるための闘争に巻き込まれ、他者からの承認によってひとりの自己としての核を取得すると想定しているが、Aさんの生き方は、人がひとりの自己であることは、人⇒他者からの承認⇒自己の取得という単線的なプロセスではないことを明らかにしている。そしてAさんの生き方は、自身を構築する権力から距離をとりながらも、現在社会を生き抜く「しなやかな自己」のありかたでもある。

## 文献

Honneth, Axel. 1992 *Kampf um Anerkennung*. Verlag. (=2003, 山本啓・直江清隆訳『承認をめぐる闘争』法政大学出版会.)

片桐雅隆, 2011, 『自己の発見』世界思想社.